建礼門院右京大夫集における敬語

田村忠士

本稿は建礼門院右京大夫集における敬語の実態を、活用語を中心にして明かにしようとするものである。本文は古典文学大系本によったが、必要に応じて建礼門院右京大夫集校本および総索引〈井狩正司・三笠書院〉を参照した。

一、尊敬語

地の文に現われる尊敬語と待遇される人物は別表のとおりである。

右の表から見て、待遇される人物に三つのグループのあることがわかる。

A、「せ（させ）給ふ」・「せ（させ）おはします」で待遇されるグループ

B、「〜給ふ」で待遇されるグループ

C、「る・らる」で待遇されるグループ

である。

Aに属する人物は高倉帝をはじめとする皇族であり最高の待遇が与えられているのは当然であろう。したがって他の尊敬語も「給はす」、「おはします」、「（御）〜ある」「召す」（「着る」の意の尊敬語としては他の作品においても皇族を対象とする最高位の人物に用いられている。この作品においても作者の母には敬意の低い「着らる」が用いられている。）といった敬度の高い語が用いられているが、このことからただ一度ではあるが「おはします」で待遇されている大炊の御門の斎院もこのグループに含めてよいように思われる。また八条の二位殿は皇族ではないが建礼門院の御母としてそれなりの高い待遇がなされてこのグループの一員として扱われている。なお釈迦仏に対して一例「させ給ふ」が使用されているが、釈迦の比較的多く登場する「今昔物語」では全てが「給ふ」待遇であり(1)、「成尋阿闍梨母集」などにもおいても同様である。この記事は平家滅亡後「さそはれて」「ねはんゑ」に行った時のものであるが、「さほどの事（「釈迦仏の入滅せさせ給けんをりの事」）はいつもきゝしかど、この比きくはいたくしみ〴〵とおぼえてものがなしくなみだのとまらぬも云々」（四八九ページ）という作者の心情から用いられたものであろう。

問題となるのは近衛殿と大納言の君である

①近衛殿、二位中将と申し比、隆房、重衡、維盛、資盛などの殿上人なりし、ひきぐせさせ給て、白河どのの女房たちさそひて、所〴〵の花御らんじけるとて……（四一九ページ）

②大納言君と申しは、三条内大臣の御女ときこえし、その人かく申と申させ給へば（四二〇ページ）

この人物に関する記事はこの箇所だけであるので何ともいえないが、①のばあいは「御らんじけるとて」とあるから「隆房、重衡」以下を引用部に入れるとすれば問題はない。また②は該当部分を「申さ＋せ給ふ」とせず、「申させ＋給ふ」としたらどうであろうか。松尾聰氏が「国文法入門」(2)において、

平安中期からの謙譲語として「聞えさす」「申さす」がある。「聞ゆ」「申す」に尊敬から謙譲に転義した「さす」「す」をつけて謙譲の意味を一層強めたものらしい。

なお上記以外に後白河院を主語とする「おほせ下さる」がある。

	る・らる	しあり	る召す（着）	召さる	のたまふ	すおはしませ（させ）	給ふ（させ）	おはす	すおはしま	たぶ	～給ふ	給はす
高倉院		○		○		○	○					○
後鳥羽院						○	○					
安徳帝							○					
太皇太后宮		○	○			○	○		○			
建春門院		○	○				○		○			
建礼門院		○					○		○			
八条二位殿							○					
釈迦仏							○		○			
大炊の御門の斎院							○					
近衛殿							○					
大納言の君											○	
小松の大臣					○			○			○	
みくしげ殿										○	○	
殿宮門院にさぶらふ女房											○	
やしまのおとど												
権亮維盛	○											
知盛の中納言	○											
宮の亮	○											
資　盛	○											
大内入道内大臣	○											
成親の大納言	○											
公経の中納言	○											
通宗の宰相中将	○											
頭中将実宗	○											
民部卿定家	○											
親　　長	○									○		
上西門院女房	○											
高倉院の中納言の典侍	○											
斎院の中将の君	○									○		
宮の御方にさぶらふ人	○											
播磨の内侍	○											
弁のとの	○											
輔どの	○											
作者の母	○											

と述べておられるものである。この「申す」の受け手が高倉帝であることからも「謙譲の意味を一層強めたもの」として「申さす」が使用されたと考えられないことはない。資料が少いために断定はされぬが、私は以上のように考えこの二人をAグループに属さないものと見たい。

次に「給ふ」待遇人物であるが、この中には大納言の君、殿富門院の上﨟女房のように登場が一度のもの、小松の大臣のように常に「給ふ」で待遇されるもの、やしまのおとど（宗盛）のように「る・らる」によっても待遇されるものがある。（「給ふ」の用例は見られないが「おはす」「のたまふ」(3)で待遇されるみくしげ殿もこのグループに入れてよいように思われる）。問題となるのはこの宗盛のように両者による待遇の見られるばあいである。このことは森野宗明氏が、

しかし、最高敬語たる「せ給ふ」「させ給ふ」と次位の敬語たる「給ふ」の場合では、その間に、それが用いられる対象にかなり画然としたへだてがあるのに対して、一般に、「給ふ」と「る」「らる」との間にはそれと同等の距離があるとは考えられないのである。(4)

と述べられたことを裏付けているとも考えられる。ただこの作品においては、後述するように地の文における尊敬語がAグループをのぞいて圧倒的に「る・らる」が用いられている中で、重盛一人が常に「給ふ」で待遇されているという事実がある。これは重盛が平家の中心的人物であることへの、作者の認識が働いていることを示すものであり、作者の意識においては「給ふ」の方が「る・らる」よりより敬意の高い改まったものと捕えられていたのではないであろうか。また、

③（作者→資盛）「など、それをしもをられにけるか」（四八三ページ）

④（俊成→作者）「……かやうによろこびいはれたる……」（五〇九ページ）

⑤（ひじり）「としゞこの花をしめゆひてこひたまひし人（資盛）なくて……」（四六八ページ）

⑥（作者→通宗の宰相の中将）このみすのまへにて、うちしはぶかせたまはば、きゝつけんずるよし申せば（五〇六）

⑦（右に同じ）「はたらかでみしかど、あまり物さわがしくこそたちたまひにしか」（五〇七ページ）

の会話文（⑥は地の文と融合しているが、会話文として扱って問題はない）を見ても上述のことは言えると思う。すなわち③は地の文においてほとんど尊敬語の用いられない資盛への言葉であり、④は作者自身の動作をいっていることから、同じ会話文においても「る・らる」が用いられているのである。⑤はひじりと資盛の関係がはっきりしないが主従の関係に近いものと考えられ、⑥および⑦は直接の応対におけるものである。こうしたばあいに「る・らる」が用いられることなく、地の文ではすべて「る・らる」で待遇される通宗に対して「給ふ」いや「せ給ふ」までもが使用されるのは、やはり「る・らる」と「給ふ」との間の敬意の違いをそこに見ているからではなかろうか。

次に「たぶ」を取りあげる。「与える」意の尊敬語としては後鳥羽院に対する「給はす」以外に「たぶ」の三例があるのみである(5)。その為手は宗盛・斎院の中将の君・親長であり、受け手は

いずれも作者である。このうち宗盛については地の文において尊敬語で待遇されているが、中将の君についてはこの動作以外に見られず、親長にあっては地の文において他の箇所では全く尊敬語が用いられていない。したがってこれらの「たぶ」を尊敬語として一概に見なすことには問題があろう。「たぶ」について「日本文法大辞典」(6)を引くと、

また、与えられる者が自己の場合には、自己を低しとして落とした言い方となる。

とある。私は右の説をより所としてこれらの「たぶ」を考えたらよいのではないかと思う。為手に対する敬意というより自らを卑下した用法と解したいのである。

Cグループに属するのは平家の公達・女房などが主である。先にも述べたとおり中世的傾向を反映して地の文での「る・らる」は、「たまふ」が七例（うち四例が重盛）であるのに対して四十四例（「召さる」一例は省いた）の多きに達している。それも、

⑧……宮のすけの、うちの御かたの番に候けるとていりきて……さま〳〵をかしきやうにいひて……おそろしき物がたりどもをしておどされしかば（四六〇ぺ）

のようにわりと恣意的な付き方を見せているといえよう。ことに資盛に対してはその登場の多い割にはわずか二箇所に用いられているだけであり、彼と同様作者の愛人であった藤原隆信においては全く用いられない。この二人のばあいはあるいは作者の恋人であったという特殊な作者の心理が働いているのかもしれない。平家に関する人物のうちでは建礼門院の兄弟である時忠、親宗、親宗の子親長に使用されていないのが目立つ。

⑨はるどろ、みやの、西八条にいでさせ給へりしほど、大方にまゐる人はさる事にて、御はらから、御をひたちなど、みなばんにをりて、二三人はたえずさぶらはれしに（四三六ぺ）

のようなばあいは用いられているにもかかわらず。

父母兄弟に対する待遇は主従のそれはそのままあてはまらず、「人物のとらえ方に、公的社会的なそれと、私的家内的それとがあ」(7)るといわれるが、この作品では作者の兄に対しては用いないが、母に対しては「る・らる」が用いられている。日記的歌集であるこの作品にあってはむしろ「私的家内的」面が強いからであろうか（親に対する敬語の使用は、更級日記・建寿御前日記にも見える）。

次の二例は公尊敬といわれるものの用法であろう。

⑩……内裏にて御八講おこなはれし五巻の日（四一九ぺ）

⑪故女院、いらせたまひておはしましゝかたをとりはらひて、道場にしつらはれたりしあはれにて（四一九ぺ）

他の尊敬語としては「おぼす（めす）」が会話文中に用いられているだけである。

注1、今昔物語集の語法の研究・桜井光昭（明治書院）

注2、研究社

注3、他はいずれも「のたまふ」の分析的表現「いはる」が用いられている。

注4、国文学（学灯社）・第九巻第十三号

注5、「……御返し給て、隆房いでしに……」（四三七ぺ）の「給」を大系本では他本によって「たまはりて」と読んでい

るが、ここは「給ひて」と読んでも意味は通ずる。しかしそうすると為手が中宮となり「たまはす」が用いられる可能性が強いと思われるのでテキストの読みに従った。

注6、松村明編、杉崎一雄執筆、明治書院。

注7、国文学（学灯社）第十七巻四号。森野宗明「古典敬語の構造と識別法」

二、謙譲語

使用されている語は「申す」・「聞こゆ」・「奉る」・「まゐらす」・「参る」・「詣づ」・「まかる」・「さぶらふ」・「たまはる」である。このうち「参る」は貴人の所へ行くばあいと神仏へ参詣するばあいとがあり、「詣づ」は一例しかないが「住吉」への参詣となっている。「まかる」は、

⑫……心みんとて、ほかへまかるに（四五三ぺ）

⑬また物へまかりしみちに、むかしのあとのけぶりになりしが、いしずゑばかりのこりたるに（四七九ぺ）

の二例あって、主語はいずれも作者である。⑫には「雲のうへもかけはなれ」とあって、「宮中」を意識した表現とは考えられない。⑬も同様に考えてよく謙譲語というよりは丁寧語的用法とみたほうがよいように思われる。「さぶらふ」は貴人の傍に伺候するの意で特にかわった点はない。

「たまはる」は二例あるが、そのうち

⑭……給たらん人の歌にては、今すこしよかりぬべく、心のうちにおぼえしかども（五〇八ぺ）

について、大系本頭注で、

いただいた人の歌、即ち、俊成の作としてなら今少し上手なはずだがと。或いは「たまひたらん人」とよみ、賜与した方の歌ならもう少しいいのではないかの意か。

とし、「給」を「たまはる」、「たまふ」と両様に読めるとする。この箇所は諸本においてはほとんどが「たまはる」とあるから、そのように読むべきだと思うが、「評註建礼門院右京大夫集全釈」(8)ではこの「たまはる」を尊敬語と解し、「御下賜になった方の歌なら」とする。ただこれを、この作品の敬語使用の実態から考察するならやはり「たまはる」は謙譲語で、主語は俊成とするのがよいと思う。それはこの箇所が「院より賀たまはするに」を受けた表現だからである。というのはこれを尊敬語とすると主語は院となり、そうすればここも最高敬語「たまはす」が用いられるはずだからである。そしてさらに「給たらん人の歌」は、この作品において帝や院といった高位の人の所有物に対しては「御」が付されるのが原則であることから、当然「御歌」となるはずだからである。以上のように見てくると「たまはる」に当時尊敬の用法があったことを認めるとしても(9)、この作品においてはやはり「たまはる」は謙譲語と見なすのが妥当のように思われる。

「申す」と「聞こゆ」に関してはその数のみみれば前者が圧倒的に多いが、建寿御前日記と比すればその使用度は高く、ことにわずか二例ではあるが、

⑮その人の中納言と申し比、櫛をこひきこえたりしをたぶとて（四二九ぺ）

のような、建寿御前日記には全く見られない補助動詞的用法がある。

「申す」や「聞こゆ」が官位、身分、人名を受けるばあい、二語の間には「謙遜意の差異がある」といわれるが(19)、

⑯殿富門院、皇后宮と申し比（四八九ページ）

⑰……高倉院の中納言の典侍ときこえし人（四八七ページ）

を比較するとこのことは首肯されるように思われる。ただこの⑰は群本では「いひし」とあり、また中納言の典侍と同様「る・らる」待遇の輔どののばあい、

⑱宮にさぶらひし雅頼の中納言の女、輔どのといひしが（四五六ページ）

とあるので、「聞こゆ」は「言ふ」との差異がほとんどなくなっているともいえそうである。したがって、

⑲……大納言の君と申しは、三条内大臣の御女ときこえし（四二〇ページ）

⑳やしまのおとゞとかや、このごろの人はきこゆめる、その人の中納言と申し比、（四二八ページ）

などの、「申す」と「聞こゆ」が共用されるばあいも、敬意はむしろ「申す」にあって、「聞こゆ」はごく軽い敬意、さらにいえば、「言ふ」に近い語とみてよいように思われる(11)。

右以外の用法においても二者の間には同様な差異があるとされる。が、

㉑殿富門院、皇后宮と申し比、その御かたにさぶらふ上﨟の、しるよしありて、きこえかはしゝが、ゆきあひて、ひぐらし物がたりしてかへり給ぬるなごり、あめのうちふりて、物あはれなり。（中略）なつかしくもあり、さまゞ〳〵それも恋しくおもひいでられて、申やる。（四八九ページ）

の例でみると差異はないように思える。（なお「きこえかはす」は四五六ページでは「なに事も申しかはしなどせしが」とある。）しかし「申す」の客体にあたるものが、

㉒おなじおとゞの、大臣の大将にてよろこび申し給しに（四二八ページ）

㉓人のうれへ申しことのあるを、さるべきひとの申さたするをきけば、後白河院の御時、おほせ下されけるなどとて（五〇一ページ）

のような朝廷や帝にあたる用例は「聞こゆ」にはない。また資盛の作者に対する会話において、

㉔たとひなにとも思はずとも、かやうにきこえなれても（四六四ページ）

㉕……なほざりにてきこえぬなどなおぼしそ。（四六五ページ）

のように「聞こゆ」が用いられ、「そのはる、あさましくおそろしくきこえし」という一の谷での平家敗北以後では、

㉖申しやうに、今は身をかへたるとおもふを、たれもさ思ひて、後の世をとへ（四七一ページ）

㉗まめやかにこのたびばかりぞ申もすべき（四七二ページ）

のように「申す」が用いられる。これは近づく死への緊迫感が増大するにつれ、資盛の作者に対する心のあらたまりがこうした変化をもたらしたのではないか。このようにみてくると㉑の例は、「申す」が「聞こゆ」の領域を侵しその用法を拡大していくという一様相を示しているものと考えられるであろう。

「申す」は右のような用法のほかに、

㉘たえまひさしくおもひいでたるに、たゞやあらましと返々おも

ひしかど、心よわくてゆきたりしに、くるまよりおるゝをみて、「世にありけるは」と申しをきゝて、心ちにふとおぼえし
（四五〇ぺ）

のように、その客体が作者であるばあいがある。これらは謙譲語とはいえず、むしろ丁寧語的なものとしてよいであろう。

㉙……宮の御物のぐめしたりし御さまなどの、いつと申ながら、めもあやに見えさせたまひしを（四一六ぺ）

はどうであろう。また、

㉚その人かく申と申させ給へば（四二〇ぺ）

のばあいも問題になろう。㉙は他に、

㉛……花はちりちらずおなじにほひに、月もひとつにかすみあひつゝ、やう〳〵しらむ山ぎは、いつといひながら、いふかたなくおもしろかりしを（四三七ぺ）

のように風景に対した時は「申す」が用いられないところをみると、中宮の御ことに言及するために用いられた謙譲語としてみてよいであろう。㉚については和田氏の説かれるように「アナタ様ノコトヲコノヨウニ申シテオリマス」の意と解しやはり謙譲語とみるべきであろう。その他、

㉜「それはそら事を申ぞ」（四二〇ぺ）

のように高倉帝の、いわゆる自敬表現的なものが一例見られる。

「奉る」と「まゐらす」については、前者の五例に対して後者は十七例の多くに達しており、中世的色彩を濃くしていると思われる。しかも補助動詞的用法が「申す」の一例、「聞こゆ」の二例にとどまるのに、全用例十七例中十二例をしめている。と同時に「まゐらす」の客体は尊敬語において「せ（させ）給ふ」、「せ（させ）おはします」で待遇されるAグループに集中しており、客体に対する敬意の高さを示している。ただ仏に対しては、

㉝手づから地蔵六体すみがきにかき参せなど（四七五ぺ）

とある一方

㉞……手などあらひて、念仏申（四九〇ぺ）

や

㉟なぐさむ事もなきまゝには、ほとけにのみむかひたてまつるも、さすがをさな〳〵よりたのみきこえしかど（四七七ぺ）

のように「申す」、「聞こゆ」でも待遇されているが、その間の事情は明かにしえない(12)。

「奉る」にあってはその客体がいずれも、

㊱……ほとけにむかひたてまつりて、なきくらすほかの事なし。（四六五ぺ）

のように仏に関するものに限られるようである。直接の客体が仏でなくて、あせう上人、故建春門院であるばあいもあるが、これも同様に考えてよいであろう。

三、丁寧語

この項に関しては会話文において「侍り」・「候ふ」が一例ずつあるのみで何ともいえない。

注8、本位田重美・武蔵野書院

注9、伊奈恒一氏は「たまはる」が尊敬に転じたのは「大体平安時代の中頃から」とされる（語文・S38・1）が、杉崎一雄氏は「それは中世――室町期――ごろからだったようである。」

（国文学・第十七巻四号）で述べておられる。

注10、「申す」「聞えさす」・「聞ゆ」――官位・身分・人名を承ける場合について、岡崎正継・文学語学S39・6

注11、この用法のみでなく中世の「聞こゆ」について穐田氏は「王朝的雅語」というふうに考えておられる（続「申す」と「聞ゆ」・国語国文S40・9）

注12、宮地幸一氏は「成尋阿闍梨母集」では仏に対して「参らす」は用いられているが、「きこゆ、きこえさす」は全く見当らないとされ、「すべて「奉る」で待遇されている。」とされる。（東京学芸大紀要・第二二集）

――山口県立岩国高校――